

東京五輪 環境にやさしく

重点は暑さ対策、CO₂削減

社会



地下水活用で涼しく

環境省は、2020年東京五輪・パラリンピックを見据え、「環境にやさしい五輪」の実現に向けた構想を発表した。

酷暑の中で五輪になることを想定し、体感温度を下げる対策を講じるほか、最先端の環境技術を大会会場や周辺地域に導入し、二酸化炭素(CO₂)の排出削減も推進する。アスリートや観客にとっての快適な空間を整え、日本の先進技術を世界にアピールする狙いもある。

構想によると、五輪に向けて今後重点的に取り組むテーマは、①低炭素化の推進②リデュース(発生抑制)、リユース(再利用)、リサイクル(再生利用)の「3R」の推進③暑さ対策・水環境の改善④情報発信――が柱。

このうち、特に先行して取り組むのは暑さ対策。環境省によると、東京の平均気温は、1964年に開かれた前回の東京五輪のころと比べ1.3度上昇。今回は、開幕が真夏の8月とあって「暑さ

対策は大会の運営に関する重要な問題」(環境省幹部)となる。

環境省は来年度から地下水を活用して体感温度を下げる取り組みに着手す

2020年東京五輪 環境省構想

- 環境にやさしい五輪
- 環境都市東京
- 環境技術の情報発信

低炭素化の推進

▶ 施設に再生可能エネルギーを積極導入 ▶ 電気自動車(EV)・燃料電池バスの技術開発

3Rの推進

外国人にも分かりやすいごみ分別収集ラベル導入を検討

ヒートアイランド対策・水環境の改善など

▶ 保水性舗装などを使った体感温度の低減 ▶ 大会会場や会場周辺の水質浄化

情報発信

▶ 施設に導入する低炭素技術を国内外に発信 ▶ 国立公園の魅力を外国人旅行者に発信

る。例えば「ルーバー」と呼ばれるブラインド状の日よけを屋外に設置し、くみ上げた地下水をルーバーに流すことで、どれだけ体感温度が下がるか確認する実証実験を始める予定。

EVを5分で充電

環境省はこうした取り組みで体感温度を約10度下げることができると見込んでおり、成果が確認されれば、マラソンコースの観客席付近などに設置することも考える。屋外と屋内の温度差を縮めることにもつながるため、冷房の使用が減り、CO₂の削減にもなる」とみている。

一方、低炭素化を推進するため、大会施設に再生可能エネルギーの導入や、移動手段となる電気自動車(EV)や燃料電池バスの技術開発を加速。3Rの



環境省の実証事業で東京都内を試験走行するEVバス＝同省提供



体感温度を下げる効果が期待される「ルーバー」

推進では、外国人にも分かりやすい、ごみの分別収集ラベルの導入を検討する。EVや燃料電池バスの技術開発では、既に5分間で充電できるシステムの研究などが進行中。EVバスの普及が進めば、大会出場者が選手村から競技会場に移動する手段として活用できそうだ。

国交省や都と連携

ただ現時点では、構想の多くが実用化以前の段階にあり、実際に五輪本番で活用するには予算面の裏付けや他省庁などとの連携が不可欠。環境省は、省単独の予算だけでは対応は難しいとみており、まずは国土交通省や東京都などと会合を重ね、実現に向け準備を進める方針。

東京五輪まで6年を切り、環境省幹部は「例えば五輪の際にEVを走らせるにしても、具体的にどこに何台走らせるのかまで詰めていかないとけない。6年という期間は長くない」と具体化を急ぐ考えだ。(時事)